

共生社会を担う子供を育成する 道徳教育の実践的研究

—発達障害について知り、考える授業プログラムの活用を通して—

研究構想図

長期研修員 金井 智之

児童の実態

- 生活や学習面で大変さがある友達を、“助けなければ
ならない人”としてみている。
- 特定の人間関係との関わりに安心感を感じ、人間
関係が固定化している。



教師の願い

- 人と自分の違い（個性）を受け入
れて、相手のことを大切にできる
ようになってもらいたい。



授業プログラム

準備

教師用プログラム手引書

- 授業プログラムの目的や留意点の解説

児童アンケート

- 児童の実態把握



発達障害類似体験

(2)イ よりよい人間関係の形成

大変さへの気付き

見えない大変さがある
人がいるんだ。

自他の個性を理解

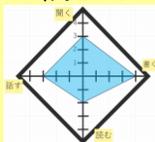
自分にも友達にも得意な
ことや苦手なことがある。

意思決定

誰にでも苦手はあるのだから、
特別扱いをしないようにしたい。

学級活動

- 「聞こえづらさ」「見えづらさ」
の体験活動の設定
- 得意・苦手グラフを比較した
話し合い活動の設定



オリジナル教材

中学年用教材『学級会』内容項目：公正、公平、社会正義

高学年用教材『思いやりの行動』内容項目：親切、思いやり

- 目に見えない大変さがある
児童が登場する内容
- 身近な場面の設定
- 児童が葛藤する中心発問

振り返り

普段の様子から、話し合いが苦手そうと
決めつけてしまったことがあった。人
によって関わり方を変えずに誰にでも同
じ気持ちで接するようにしたい。



道徳的
心情の
深まり



どのような相手でも、接し方
は変えてはいけない。



相手を思いやるには、相手の
気持ちを考えることが大切。

自分だけ特別視されて助けられること
が嫌な人もいます。私にも苦手なこと
があるので、相手の気持ちを考えて、
助け合っていきたい。



個性の尊重について
考えを深める

目指す児童像

個性を尊重し合える児童



授業実践(高学年用プログラム) 第6学年

準備

学級活動(2)イよりよい人間関係の形成

児童アンケート

児童の実態を把握し道徳の導入で提示

めあて「見えない大変さについて知り、よりよい人間関係について考えよう。」

発達障害類似体験

指示その3

- 1 その場に立ちます。
- 2 両足をできるだけひらきます。
- 3 両手をぐるぐると回します。

「見えづらさ」の類似体験



指示内容が、すぐに理解できなかった。

大変さへの
気づき

得意・苦手グラフを比較した話し合い活動



自分と苦手なことが同じ人や、違う人、いろいろな人がいることが分かった。

自他の個性
を理解

見えない大変さがある人だけを特別視するのは、どうかかな。



私がその人だったら、嫌かもしれない。

学級活動の振り返り

得意・苦手は人それぞれなのだから、みんな同じように接したい。



意思決定

めあて「相手を思いやるために大切なことは何だろう。」

オリジナル教材

教材名「思いやりの行動」:主人公が、読むことに大変さがあるトモ君の活動を手伝った自分と、トモ君自身に活動をさせたアツシ君の行動を比べ、葛藤する物語。

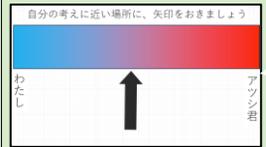
中心発問



「今までの行動を思い返した」時の主人公は、どのようなことを考えていたでしょう。

主人公
に共感

心情メーターの活用



葛藤

自分の行動は間違っていないと考えている。私が主人公でも、トモ君を助けようと思う。



助け過ぎちゃったと反省していると思う。自分で発表ができて、トモ君は満足そうだった。



道徳科と学級活動をまとめた振り返り

大変さを聞かれるのが嫌な人もいるから、様子を見て、助けが必要か分かるように考えることが大事だと思う。



個性の尊重
について
考えを深める

誰でも苦手がある。自分の足りないところを補い合えるようにするのが大事だと思う。



成果

・共生社会を担う子供を育成する授業プログラムを実施することで、目に見えない大変さへの理解を深め、個性を尊重し合う心情が養えた。

課題

・授業プログラムの中で、児童の心情が複雑に変容するので、授業プログラムの目的や目指す児童の理想像を明確にしてから実践を行う必要がある。

提言

・「発達障害について知り、考える授業プログラム」を基にして、現代的な課題を取り上げた授業実践を行うことで、共生社会を担う子供を育成する道徳教育の充実を図りましょう。